原　著

随想と化したる論文

多種多様な心理学と共に生きる

大学院総合福祉研究科
教　授　吉　田　章　宏

原　著

随想と化したる論文

多種多様な心理学と共に生きる

大学院総合福祉研究科
教　授　吉　田　章　宏

はじめに

私は、昨2008年度、「**多種多様な心理学の多種多様性と共に生き対処する在り方について：諸々の心理学の＜混沌＞の世界に生きる研究者／実践者、教育者／学習者にとっての問題**」（吉田章宏、2009）と題する論文を執筆し、本誌「淑徳心理臨床研究」に寄稿した。本稿は、その昨年度の論稿に続くものである。

あの論考を発表した後、二三の展開があった。そのことを、まず、以下に報告してから、本題の叙述に入りたい、と思う。

小さな種子から小さな花が咲いたこと

あの論考は、私が自らの生涯の終焉が視野に入って来た現在の状況に応えて、これまでの自らの心理学の学びを省みて、これから、心理学を学ぼうとする人々に、つまりは、近くは、淑徳大学大学院に心理学を学ぶ若き学徒たちに、遠くは、心理学の研究にこれからの生涯を捧げようとしている多くの若者たちに、さらには、これから、現在の私が置かれている境涯にいずれは立ちいたるであろう心理学研究者としての、先輩はともかく、同僚・後輩のお仲間たちに、一つの贈り物として、心から私がお伝えしたいことを、率直に述べるという性格をもった論考であった。実は、私としては、最初は、ちょっとした「研究ノート」あるいは「メモ」のような積りで書きだしたのだったが、書くにつれて、次第に思いは膨らみ、あのように長大な論稿となった。

さて、その後、人間科学研究国際会議（International Human Science Research Conference）が、例年のごとく、2009年6月17日から20日まで、Norwayの西海岸

枠で、あの論考にさらに幾つかの考察を加えたも
発表した。発表時間は30分、討論が20分の割り当
あった。論題は、「淑徳心理臨床研究」の論稿に
して、"On multiple ways of living with the multiplici
multiple psychologies" とした。配布用に準備し印
た論文は英単語で約一万語に及ぶものとなった。
より、30分でその長さの論稿を口頭発表すること
可能である。で、いわば、さわりを抜粋し、30分
まるように調整して、口頭発表した。おおよそ30
の参加者が笑顔をもって聴き入ってくださった。
手には、長年の親友である現象学的心理学者Am
Giorgi, Steen Halling, に加えて、Chris Aanstoosと
奥さんで女流詩人Mary Dickinsonを専門とする英
研究者、などが加わってくれた。さらに、私が
年から1981年にFulbright Senior Researcher プログ
でほぼ1年間滞在したDuquesne Universityで、A
Schutzの現象学的社会学の手ほどきを私にして
さった哲学教授Lester Embree も加わった。日本
同行した、哲学者・竹田青嗣（早稲田大学）、西研
光大学）、渡邉恒夫（東京理科大学）の諸氏も、
には、淑徳大学大学院出身の愛甲修子（現帝京平
学）氏も、聴き手に加わってくださった。私の話
の質疑応答も活発で、まずまずの出来であった。

帰国してから、Seattle UniversityのSteen Hallin
授から、e-mailで、あの論文を読んだが、面白
で、今年のIHSRCを代表する論文として推薦した
ついては、語数は七千語以内というのが規定なの
縮めて仕上げて欲しい、との連絡を受けた。私に
のある筈もない。掲載書は、*Phenomenology 2008*
こと。その後、編集者から、Steen Halling 教授か
薦を受けたので、編集の仕事に入りたいとの連
あった。その連絡の主の編集者が、何と、哲学

Hallingが、今年のIHSRCの代表論文に選んで推薦してきたことを、喜んでいると、メールをくれた。そして、編集者Lesterと私Akiとの、e-mailでのやり取りが始まった。Lesterは、一万語の論稿を七千語に縮める仕事の手伝いをしよう、と申し出てくれた。アメリカ人らしいユーモアで、"Fat paper" を "diet" して "slim" にしよう、との提言であった。その温かいお申し出を感謝しつつ受け入れて、彼のダイエット・プログラムに肥満の身体を委ねた。幾つかのやり取りがあり、私の論稿は、"Living with Multiple Psychologies" と題を改めて、七千五百語ほどのものとして仕上がり、未だ印刷と校正の作業が残っているものの、Lesterの連絡によれば、次の論集に収録されることが確定している。

YOSHIDA, Akihiro (2010) Living with Multiple Psychologies. In Michael Barber, Lester Embree, and Thomas J. Nenon ed. *Phenomenology 2008. Volume 5, Selected Essays from North America*, Zeta Books, Bucharest, Forthcoming

私は、このことに特別な喜びを感じている。そして、このことが私にとって特に喜ばしく感じられる理由を考えてみた。すると、幾つものことが浮かび上がってきた。1）まずは、本誌『淑徳心理臨床研究』に載せていただいた論考が、いわば種子となって、Moldeで小さな花を咲かせたということ。2）私の人生を通しての、心理学での彷徨の歴史を、一人称的に、率直かつ正直に語ることができたこと。3）その率直かつ正直な語りが、今度は、*Phenomenology 2008*に収録されることで、世界の、人間科学研究の志を同じくする多くの研究者や実践者たちに、興味を持って読まれる可能性が生まれて来たこと。4）『淑徳心理臨床研究』に寄稿したときには、具体的には、私が大学院で親しく接していた大学院生の方々たち、その将来に期待を寄せている若い人々に、向けて書いたのだった。年老いた私（執筆時74歳）の心理学における長い失敗談を語りつつ、彼らと彼女らが将来に向けて、その「心理学の世界」での学びの遠い道程を共に思い描くことによって、その途上で出会うはずの数々の困難を克服して行くことの一助にもなれば、と思ってのことだった。ところが、それが、いまや、読者の幅を広げて、世界中の何処かで、見知らぬ誰かに、ことに世界の若い人々ら一年間過ごした、PittsburghのDuquesne大学での時間が、IHSRC, Steen Halling, Lester Embree, Amede Giorgi などなどの縁、——日本流に言えば「人脈」も知れない、——によって、一歩前進して、心理学の将来を、世界中の同士たちと共に考える契機となる可能性を開くことができたこと。6）*Phenomenology 200* は、少なくとも5巻からなる浩瀚な出版物だそうで世界の諸大陸を代表する幾つかの巻から成り立っているらしいのであるが、私の論稿が収められるのは、上記のように、"*Phenomenology 2008. Volume 5, Selecte Essays from North America*"であって、日本が含まれるジアの論文集ではなく、北米の論文集である。これは、私の論稿を今年度の代表論文として推薦してれたIHSRCの本部が西海岸のSeattle大学に在るこによるものである。しかし、私には、あたかも、のことが、私の1964-67年のIllinois大学、1968-69年のCornell大学、1980-81年のDuquesne大学、それぞれで過ごした日々の時間、そして、IHSRCでの長年の活動の時間、それらすべてが、この時に一挙に凝縮されて、このことに結実した、という思いを抱かせてくれるからであることに気づいた。7）もちろん、今年度のIHSRCの代表論文に選ばれたということそのことも、素直かつ正直に言って、うれしい。これは、友人Steen Hallingが、選んでくれたものらしいのだが、しかし、編集者の哲学者Lester Embree、Duquesne大学での学恩ある恩師の一人、による温かいコメントから、私の原稿を読むことを楽しんでもらえたらしいことが伝わってきて、私の手を離れた論考が、客観的に、それ自体、外国語でも読むに値する論考となっている、とSteenとLesterという慧眼の二人が認めてくれた、と信じることが出来ることが、うれしいのである。8）しかも、その論考の内容たるや、私の、心理学における「彷徨」を基礎にして、心理学の将来に対する現象学の役割への提案をしているために、あたかも、私の生涯のマイナス・カードをすべて集めてみたところ、急転直下、二人の現象学者の目で見て、一挙にプラス・カードに転化したと告げられたかのような、そういう逆転の感覚を楽しませてくれるからであろう。9）さらに、それは、現象学的心理学によって可能になることで、私がようやくにして辿り着いた現象学的心理学のこれまでの学びが、私の人生の意味

に、加えるならば、以上の喜びを、上記のように、その契機となる種子を育てる場となった、「淑徳心理臨床センター」の方々と共有したい、という感謝の念と素直で純な気持ちが自らに生まれていることに、現在の自らの在り方を含めて、ささやかではあるが、深い喜びを感じるのであろう。

という次第で、昨年度の本誌の原稿が種子となって、この一年の間に、小さな花を咲かせたことを、感謝の心と共に、「淑徳心理臨床研究」の読者の皆様にご報告させていただく。

ただ、淑徳における私の残り時間は、2010年３月末までとなり、その間に為すべきことは、余りにも多く、この論考で展開したいと最初に予定していた内容を、ここで全面展開することは、既に不可能な状況となってきている。で、ここでは、潔く、その全面的展開を諦めて、現在の私に可能な時間の範囲で、昨年来考えてきたことの素描を描いて、ご参考に供し、その詳細な展開は他日を期することにしたい、とお断りさせていただく。この素描は、恐らく、2010年にSeattle Universityで開かれる第29回人間科学研究国際会議での発表論文のスケッチとなることであろう。感謝の念をもって執筆させていただく。

再論「多種多様な心理学と共に生きる」

まず、昨年度の論稿の考察の筋道を、新たに簡潔に述べるところから始めてみよう。これは、昨年度の論稿では書かなかった梗概にも代わるものとなるであろう。

心理学と呼ばれる学問領域には、多種多様な心理学が併存しており、その全体は秩序ある状態というよりは、混沌とした状態と呼ぶに相応しい。心理学を学ぶ心理学学徒や学習者は、この混沌を眼前にして、この混沌とした状態にある心理学を如何に学ぶべきか、という学び方の問題が、さらには、心理学の世界で、学習者として如何に生きるべきか、という生き方の問題が、自らに突きつけられていることに気づかざるを得ない。この問題は、そのような学徒・学習者を導くべき教師・教育者にも、どのように導くか、という教え方、また、どのように教える生を生きるか、という生ぶにせよそれは、学習者にとっては、いずれにせ「一時的自己同一性」なのであるからとして、その択を学習者の自由と自主性に任せる（霜山徳爾）在方も、一つの可能性である。無秩序であることをあのままに伝え、秩序を見出す可能性とそれを見出すとを自らの責任と感じる思いを、すべて幻想として壊し、秩序の創造への責任の思いから解放してあげ（Sigmund Koch）のもまた一つの在り方である。さには、無秩序を現状として知らせた上で、無数の中らその時点での親和性により、一つを無作為的に、るいは運命的に、選び「結婚」し、その時点での運をその一つに賭けることを勧める（Hall & Lindze在り方も、また、一つの可能性である。そのほか可性は多種多様であろう。研究者と実践者にとっても状況は類似している。研究者として、混沌に秩序をたらす強力で統一的な心理学とその理論を求めるの一つである。あるいは、混沌をその在りのままにし混沌を楽しみつつ、混沌の言わば「鳥瞰図」をもとることに研究者としての喜びと使命を見出すのも、た一つであろう。実践者としても、一つの心理学一の理論の原理原則に、自らの実践の総てを賭けて生るのも一つの可能性であろうし、また、可能な限り数の、多種多様な心理学を、いわば折衷的に、無原と謗れば謗れ、現実の豊饒性と複雑性は単純な割りりを許さないのだと言わんばかりに、手当たり次第活用して、現実の複雑性に、実践者として立ち向かうとするのも、また、一つの可能性であろう。

いずれにせよ、心理学が整然とした秩序の中にあというよりは、果たして秩序がそもそも在り得るのということすら疑わしい混沌の中にあることについは、おおよそ合意したとしても、その混沌の中で、人の心理学学徒として、学習者/教育者として、あいは研究者/実践者として、どのように生き、その沌にどのように対処していくかという、いわば、生方についての実存的問題が提起されることは、無自的あるいは自覚的の差はあり得ても、どうしても避られない。

この問題は、しかし、心理学に限定された問題でない。いわんや、心理臨床実践に限定された問題でない。人間に関わる諸学においては、普遍的にみらる問題なのである。統合へ向けての圧力として働く

関係、人間関係の制約などなど、多種多様に存在する。

そこで、新たに生まれる問いが問われる。心理学の混沌の世界において、一人の心理学学徒として、学習者/教育者として、あるいは研究者/実践者として、一人の人間として、一人の実存者として、如何に対処しつつ生きるか、という問いである。

この問題を、多面的に、主観的にも客観的にも、生きつつ眺めつつ、考察して、その解決の可能性と不可能性を探究しようというのは、極めて、野心的な挑戦である。その解決に至らずとも、その解決の多様な可能性を探ろうというのが、ここでの試みである。

問題の多面的展開のための素描

私は臨床心理学者ではない。そこで、心理学研究者の一人として、あるいは、教育心理学研究者の一人として、しかし、教育実践に直接関わり、教育実践に貢献する教育心理学を目指して来た心理学研究者の一人として、この問題をどう考えるかを述べて、臨床心理学を専門とする方々のご参考に供したい、というのがここでの論述の基本姿勢である。

現象学の洞察によって、心理学の秩序と混沌は、それを眺める、見る、視る、聞く、聴く、それを生きる、などなどする人間の、それぞれの採る、あるいは置かれた、立場・視点・視座により、多種多様にその姿を現わす。このことは、改めて詳細に論じなくとも、共通に承認できることである、としておきたい。それは、現象学では視点の問題としても、また、世界の問題としても、中心的な問題として、多くの論者によって多様に論じられて来ているところである。上述の論稿で、そのことの議論は、一旦は済ませたものとし、そのことを一つの自明性（taken-for-grantedness: Selbst-verstaendlichkeit）として、以下の素描を始めたい。

次に、以上の「多種多様な心理学の秩序と混沌の世界」そのものを、その生涯を通して生きている、あるいは生きて行く、一人の人間X氏を想定して、考えてみることにする。ここで、Xが採る立場・視点・視座など（以下、視点で代表する）には、これまた、多種様性に繋がって行く。人は、多種多様な心理学に、れぞれの時期に、多種多様な生き方で、関わりながその生涯を生きて行く。

ここでの展開に参考になる論考がある。それE.フッサールの『ヨーロッパ諸学の危機と超越論現象学』と小論「幾何学の起源」である。もちろん直接そのままあてはめればよい、というような単純関係ではない。しかし、本質的な問題は、共通してる。そして、フッサールが、学問の在り方、ことにの伝統の継承と発展という大きな問題を考えているに対して、ここでは、心理学という個別科学の学問生きる人間の在り方の可能性という、フッサールの題提起に比すれば小さな問題であるという差異はる。が、しかし、本質的には、同じ構造を成してい問題なのである、そして、実は、現象学的な視点かすれば、多種多様な一人ひとりの人間の在り方からみ上げて行って、諸科学全体、さらには、学問全体考えるという、心理学に相応しい道も、決して軽視れてはならない、と私は考えるのである。

心理学の多種多様性と生き方の多種多様性は、相に絡み合っていて、どちらが因でどちらが果というとは、簡単にも、単純にも、言えない。いわば、鶏卵のように因果は双方向的関係にある。そこで、ず、

A. 心理学と共に生きる生き方の多種多様性：その実性と可能性
B. 人間が関わりつつ生きる心理学の多種多様性：の現実性
C. 心理学の多種多様性の在り方の可能性
D. 心理学の多種多様な可能性を自覚したときに生れる、「心理学と共に生きる生き方」に開ける新たな可能性…、というような展開をいまえている。

A. 心理学と共に生きる生き方の多種多様性

ここでは、心理学を生みだす心理学研究者の生きが、まず、主題化される。

1） **絶対主義と相対主義。**まず第一に、自らがる心理学が既に唯一の「正しい」心理学であって、

の心理学の中の一つである、それぞれの心理学には、それぞれの存在理由と正当性があるのであって、自らの採る心理学がその総てではない、とする視点（B）が考えられる。つまり、それは、自らの採る心理学が、他の心理学と同様に、“one of them”（多くの中の一つ）である（あるいは、に過ぎない）とする視点である。これは、いま想定している、ある一時点における、Xの視点（A）あるいは（B）からの、「心理学の混沌世界」のいわば二つの世界像である。前者を絶対主義的と呼べば、後者を相対主義的と、呼べるかもしれない。

2）**全体状況への受動と能動、個人状況への受動と能動。世界中心主義と自己中心主義と。**上記の絶対主義あるいは相対主義どちらの視点の場合でも、殊に（A）の絶対主義の場合でも、よほど無知で無い限り、多種多様な心理学が歴史的に存在して来たことと、しかも、現在も存在していることとは、認めざるを得ないであろう。したがって、それら多種多様な心理学に対して、一人の人間として、どのように対処するかという問いは、どちらの視点に立つにせよ、一人の人間としてのその個人に問うことは出来る。それは、自問であっても、他問（自問でない問い）であっても、どちらでもよい。この場合、対処とは、未来に関わることであることは自明である。この問いに対して、二つの視点がありうる。一つは、自らがどのような心理学を選んで生きていくかという問題のみが関心事であって、心理学の世界全体がどのようになるかについては、いわば「与えられた状況」として受け止める「私」中心の視点・立場がある。その視点にも、全体状況と個人状況の両方に受動的である場合は、「なるようにしかならない」と運を天に任せるような姿勢が考え得るが、ここでは、これ以上は取り上げない。ここで問題となるは、全体状況に対しては受動的、個人状況に対してのみ能動的、という立場である。与えられた全体状況で、どのように生きていくかを考えて選ぼうとする立場である。これには、その本人の生涯という比較的短い視点で、あるいは、もっと短くは、当面の対処の仕方を考える視点で、問題が捉えられている傾向を含めておこう。さて、それに対して、心理学の世界の全体状況の強い関心を抱き、その現状を憂い、そこに、なんとか納得できる、満足できる秩序をもたらし

動的あるいは受動的どちらでもあり得るだろう。
全体状況に秩序を求める立場は、与えられた全体
を単に個人として受け止めて、その中でどのよう
きるか、ということを考えるだけに留まらず、そ
体状況に一定の、あるいは特定の、秩序をもたら
革を自ら目指そうとする志向を強くもつ立場であ
これは、本人の生涯のスパンで考える場合もあり
が、それを超えた比較的長い時間的視点あるいは
的視点で問題が捉えられている傾向がある。この
は、「世界」中心の視点・立場と名づけておこうか

3）**心理学における一神教と多神教。一神教的**
と多神教的世界。単一心理学による心理学世界の
を良しとして、それを目指すのと、多数の心理学
存を良しとして、それを目指すのと。多数心理学
存する心理学世界の混沌を嘆き、単一心理学に
「全国統一」を希求するのと、むしろ、その混沌
しみ、混沌の現状を容認して、積極的にその混沌
らに促進することを希求するのと。コスモス希求
オス希求と。世界統一志向と平和共存志向と。

4）**「心理学世界そのものを変える」のと「心**
世界を見る＜ものの見方＞を変える」と。現実世
革志向と世界観形成志向と。単一心理学による支
せよ、多数心理学の共存にせよ、それぞれの希求
現実の実現を目指すのと、現実の実現よりも、
現実を支える「ものの見方」、思想、あるいは、
オロギー形成を、目指すのと。前者と後者は、世
のものを変えようとする立場と、世界そのものは
ままにしておいても、それを見る「ものの見方」
ての世界観を変えて、そこに「秩序」を見ようと
立場、という二つの立場の間の対比とも言えるで
う。これは、歴史的展開における段階の差異であ
もしれない。つまり、まず或る段階で、見方が生
て、次の段階で、好条件に恵まれれば、その見方
想とする現実変革も導き出されうるのであろうか
その意味では、「ものの見方」や「夢」や「理想」に
それが現実化される未来が期待されるという限り
いて、現実性が無いわけでは決してない。

言いかえれば、「世界に秩序をもたらす」とい
合にも、少なくとも、大きく分けて二通りの場合
えられる、ということである。客観的な立場と主
な立場とでも、言えるかもしれない。すなわち、

心理学のみを残して、恐らく遠い将来は、それらを統合し、一つの「心理学」を創造しよう、構築しよう、という「世界変革」的な視点と立場がある。いわば、戦国時代に、全国統一を目指す、秀吉や家康のような視点である。他方には、「世界に秩序をもたらす」と言っても、何も既存の心理学に手をつけて、存続させるとか廃絶するとかいうようなことの決定を問題とするのではなくて、一人の私に混沌と見えていた心理学世界に、ある「ものの見方」を形成して、そこに持ち込むことによって、混沌の中に秩序をもたらし、その混沌の世界が、現実の在り方はそのままであっても、しかし、現在の混沌の中にも実は秩序の見られるはずであった世界として、少なくとも「私」には見えてくる、そのように「私」自身が、そして、私の「ものの見方」が、変化することを望む視点と立場がありうる。いわば、現実に世界制覇や全国統一を成し遂げるというよりは、全国統一のための「ものの見方」あるいは、思想形成を目指す立場である。もちろん、そのような「ものの見方」は、他者にも共有されることを望むことにもなり得るであろう。また、仮に他者により共有されれば、その「ものの見方」によって、他者たちにも、「秩序がもたらされる」ことになる。もちろん、どちらにせよ、これは、現実に、単一の心理学に統一しようというのではなくて、いわば、多種多様な心理学が併存している、別の見方からすれば「混沌の世界」以外の何物でもない世界そのものは、そっとそのままに変えずにおいて、その「混沌の世界」を、或る「秩序ある世界」と見ることのできる「ものの見方」を求めるという仕方で、「世界に秩序をもたらす」という立場である。そもそも、この立場からすると、「混沌の世界」というも「秩序ある世界」というも、「ものの見方」の違いであって、「混沌の世界」も一つの秩序ある世界ということになる。あくまでも「混沌の世界」であると言い続ける者には、実は、ただ、「秩序ある世界」と見る「ものの見方」が、まだ、見出されていないだけなのだ、ということになるであろう。図らずも、秀吉、家康の名が出たが、前者には、常に政治的な匂いが付きまとうことは、指摘しておいてよい。つまり、世界制覇や全国統一には、他者を強制して従わせる、という含意と趣がある。それに対して、後者には、自然科学における、たとえば流体力学における構造を宇宙の構造に、あるいは、DNAの構造に、らには、暗号の構造に、見出すというような、含意趣を感じる。

少なくとも、「混沌に秩序を」というときに、以の二つの立場があることを、確認しておくことが大であろう。

5）**「ものの見方」の精粗**。ある「ものの見方」がえる心理学世界の「秩序」にせよ「混沌」にせよ、らく、ごくゆるい粗雑な「ものの見方」もあれば、密で精緻な「ものの見方」もあり得るであろう。たえば、自らの所属する社会・文化・歴史に埋没して て、ⅰ）自らが拠って立っている立場についての理的自覚が稀薄である場合もあれば、ⅱ　たとえば、「念論と唯物論」というような、ごく大まかな「秩序混沌」についての「ものの見方」で満足してしまっいる場合もあろうし、あるいはまた、ⅲ）極めて厳で精確な「秩序と混沌」の世界像を形成する場合もるであろう。　付言すれば、後者のうちのⅲ）のイメジとしては、たとえば、Roman Ingardenの「観念論唯物論」の精緻な分類の試みが、想起される。

6）**戦闘的と平和的と**。Gendlinの和の精神、理臨床実践から生まれる多元性の精神、異質なもの許容、自利と他利、Gendlinの統合の温和的態度A.Giorgi あるいは、S.L.Rubinsteinの戦闘的態度、れぞれの見通しの立て方とその根底にある態度。

7）**個人の基本性格の時間経過に伴う変化**と変遷可能性　人間一人ひとりの生涯行路　それぞれの個が求めるもの。初心の学徒、金、地位、名誉、真実実力、そして、超俗、超人。蘆田恵之助の「生、名利、道、安、楽」、通時的と共時的、霜山の言う「量」、適材適所、“passing identity”（人生への見通し）

8）**器量と親和性の問題**　人間一人ひとりの生き世界。多種多様な心理学学徒とそれぞれが求める心学の多種多様化　霜山の言う「器量」：心理臨床にける「器量」と一般心理学における「器量」との間同一と差異。研究者に求められるいわゆる学力と臨家として求められる資質の連続性と不連続性

9）**時代精神と社会文化歴史**：振り子の揺れ、波の上下、時代精神、外在的力と内在的力、学派と文の親和性、世代間の構えの違い、反抗の世代と柔軟世代：社会革命と社会改革

代的精神の誇り。バンドワゴン効果。欲望の力と在り方。

11）各国心理学の**各流派の離合集散**：たとえば、戦前から戦後にかけての、日本心理学のドイツからアメリカへの時代的移行は、ドイツ心理学からアメリカ心理学への融合の変化と対応していた。

12）**孤立と天才**、時間的最適性。時間的遅速「早すぎる」と「遅すぎる」、少数派と多数派、夏目漱石「天才、秀才、凡才」、ガロア、ゴッホ、ニーチェ、カフカ、賢治、‥‥

13）**心理学者の学習と発達と成長**という問題：連続と不連続、進歩と通過儀礼、心理学研究者の発達の問題、吉田「発達理論」、空海の「秘密曼荼羅十住心論」、エリクソン、ピアジェ、ヴィゴツキーの「精神発達の理論」、神谷美恵子『こころの旅』（フロイト、ピアジェ、エリクソン）‥‥。本人が言行一致で無い場合の信頼感の不足。普賢菩薩と文殊菩薩の対比。

以上のようなことを、A.　の項目内では、考えたい。さらに、B.C.D.についてのメモも、蓄積されて来ている。

と、ここまで来たとき、まだ、始まってさえいないこの原稿を書いている自らの状況に、ふと気がついた。現在の日時は、2010年1月1日午前9時である。

私の置かれた状況は、本論文の執筆、二つの論文の校正、一冊の書籍の校正、一つの博士論文の審査の統括、一つの集会の企画運営進行、そして、家族と共に過ごすべき正月の時間が、私を待っている。年賀状を書く習慣は、数年前にきっぱりと止めた。しかし、年賀状を止めただけでは、時間は足りない。若い時で れば、総てを擲って、論文執筆に集中することも出 た。しかし、七十五歳の今の私は、それをすべきで い、と自戒する。そこで、ここで「筆を擱く」こと する。

ここまでの文章でも、志ある若い人の中の誰か とって幾ばくかの刺激となって、私のアイデアと志 さらに発展させ展開してくれる人が、あるいは、現 れるかもしれないということに、淡い期待を抱く。 の淡い期待に賭けて、現時点では、「筆を擱く」こ にする。

本稿の準備のために用意したA.B.C.Dのそれぞれ 関する下調べ、下書きやアイデアのメモがA4で1 ほどになっている。2010年8月に、米国シアトル で開かれるIHSRCの発表では、きっと役立つこと ろう。そして、今度は、その発表を下地にして、新 に展開した論考を、許されるものならば、本誌の次 に寄稿したい。このように述べることで、ここで 断する」ことへの、編集委員会と読者のお許しを乞 たい。論文を書くつもりで、書き始めたのだった 随想と化したようだ。乞う寛恕。

現実の人生の時間は、限られている。

文　献

吉田章宏（2009）「多種多様な心理学の多様性と共に生き 処する在り方について：諸々の心理学の＜混沌＞の世 に生きる研究者/実践者、教育者/学習者にとっての問 『淑徳心理臨床研究』第6巻，5-25、淑徳大学大学院総 福祉研究科附属心理臨床センター